第35回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2018年9月20日(木)14:00～16:20
場所：永田町合同庁舎　1階　第1共用会議室

＜委員長＞
　　中田節也　　東京大学名誉教授・防災科学技術研究所火山研究推進センター長
＜副委員長＞
　　黒田乃生　　筑波大学芸術系教授
＜委員＞五十音順
　　池田高世偉　　隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会会長・隠岐の島町長
　　大野希一　　島原半島ジオパーク協議会事務局次長
　　久保純子　　早稲田大学教育学部教授
　　齋藤文紀　　島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター長・教授
　　佃　榮吉　　産業技術総合研究所特別顧問
欠　矢ケ崎紀子　　東洋大学国際観光学部教授
欠　渡辺綱男　　自然環境研究センター上級研究員
　　渡辺真人　　産業技術総合研究所地質情報研究部門・ユネスコ世界ジオパークカウンシル委員
〈日本ユネスコ国内委員会＞
　　秦　絵里　　文部科学省国際統括官付国際統括官補佐
＜関係省庁（オブザーバー）＞建制順・省内五十音順
　　中山隆治　　内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官
　　野玉悠葵　　内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局主査
　　渡辺大輔　　内閣府地方創生推進事務局参事官補佐
　　上野康史　　林野庁森林整備部森林利用課森林環境保全班森林生物多様性専門官
　　二井内学　　経済産業省産業技術環境局基準認証戦略室
　　井　智史　　気象庁地震火山部火山課火山防災情報調整室噴火予知調整係
　　松本良一　　環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室環境専門員
＜事務局＞
　　齊藤清一　　JGN事務局長
　　古澤加奈　　JGN事務局次長
　　野邊一寛　　JGN事務局次長
　　水野恵美子　　JGN事務局員
　　宮﨑博子　　JGN事務局員
　　三山　耕　　JGN事務局員

＜開会・あいさつ＞

委員長：お忙しい中お集まりいただいてありがとうございます。新体制になって2回目、今回初めてのジオパーク認定審査結果を出す会議となるので、活発な意見交換をしていただきたい。先週イタリアで世界ジオパークネットワークの国際会議に参加してきた。世界ジオパークネットワークは、ユネスコ世界ジオパークが連携して、審査のあり方、情報や経験を共有してきている。会場が北イタリアのオーストリアアルプスとの境にあり、石灰岩の巨大な岩体と、真向かいにトーナライト岩体が断層と接して存在している。そこが氷河で削られて、上の方には氷河が残っていて素晴らしい場所。64ヶ国から850名も集まった非常に規模の大きい会議で、日本からは58名参加。ジオパーク活動の中にSDGｓをしっかり位置付けているというのが会議の大きな特徴で、特に気候変動と地質災害についての事例発表が多く見られた。日本から参加した方は直前に台風と地震の直撃を受け、参加者がぎりぎり間に合うか、あるいは遅れて参加となった。それが非常に象徴的で、ジオパーク活動の必要性を感じさせる大会となった。今日は活発に議論していただきたい。よろしくお願いします。

＜報告事項＞

委員長：それでは報告事項ということで、前回委員会以降の活動状況等について各委員・事務局から。まず調査運営部会の報告から。

副部会長：先月行われました第2回調査運営部会の内容について報告します。一つ目、日本ジオパーク委員会調査運営部会設置規定について、日本ジオパーク委員会と調査運営部会がどういう関わり方をしているのかの確認をした。二つ目、日本ジオパーク委員会への報告書類運用の確認をした。次に、現地調査後の書類作成と委員会へ諮るまでの全体の流れの確認をした。まず調査運営部会会議の約10日前までに、実際現地に行ってどのような審査が行われたかという報告書、その審査結果を現地に伝えるための報告書の文案、委員会終了後の記者発表を行うための文案、この3つの書類を現地審査員で作成する。これを部会で審議し、部会から一週間後までに部会案を作成、最後にこの委員会に諮って確定させ、記者発表を行う。委員会に諮るまでは審査結果に各委員の意向が反映されないので、委員会において現地に伝えるべき事柄が提案された場合、正副委員長の判断で書類を最終確定させるという形になる。最後にもう一点、毎年5月に新規申請地域の公開プレゼンテーションを行ってきた関係上、同時期に日本ジオパーク委員会も開催していたが、来年度以降は委員会を同時期に開催せず、調査運営部会で公開プレゼンの評価を行い、その後インターネットを用いた電子的方法で委員会を開催し、部会決定事項について判断していただくことになる。以上。

委員長：どうもありがとうございました。細かいところを確認するときにはもう一度説明をお願いする。

事務局：ユネスコ世界ジオパークに関する審査の動きについてご報告します。今年の8月にユネスコから派遣された審査員による現地審査が、阿蘇並びに山陰海岸ユネスコ世界ジオパークにおいて実施された。審査結果については9月に行われたユネスコ世界ジオパークカウンシルで審議され、議事録確定後に発表の予定。来年のユネスコ世界ジオパーク再認定審査予定地域、洞爺湖有珠山、室戸、アポイ岳の3地域に関しては、その1年前に送るOne Page Summaryを8月にユネスコ本部へ提出した。

＜議題①日本ジオパーク委員会の役割＞

委員長：それでは議題1に入る。会議の最後で時間が余った場合、追加審議等あれば行う。この流れでよろしいですか。

各委員：異議なし。

委員長：では議題1、日本ジオパーク委員会の役割について事務局から確認。

事務局：まず資料2の会則から確認させていただきます（第2条から第4条条文読み上げ）。関連して、資料5のIGGP（国際地質科学ジオパーク計画）の定款の日本語訳。この10ページの4.4から11ページにジオパーク・ナショナル・コミッティについて書かれており、「想定されるジオパーク・ナショナル・コミッティ

の構成」とあるが、これに準じて JGC の委員構成が昨年末に改正された。次に 11 ページの 4 行目の「国内レベルにおける業務」という箇所。(条文の項目読み上げ)。そこから 3 行目ほど下の箇所で、各国ベースでもっと具体的な指針を追加できるとも記載されており、今後当委員会においてより具体的な指針をまとめていくことも考えられる。審査については、委員会の審査業務遂行のため適切な調査運営を行うことを目的に調査運営部会が昨年末設置された。資料 6 は世界ジオパークネットワークの 2018 年から 2020 年までの戦略計画。この中にユネスコ世界ジオパークの審査に関する改革案なども記載されているので、後ほど時間があれば委員長から詳しく説明していただく。もう一点、リーフレット裏面の「ジオパークになるには」というチャート。本日審査する日本ジオパーク新規認定審査は一番上のグレーの部分で、現地審査や部会での評価を受け、委員会としての審査を行う。また再認定審査は 4 年に一度行うが、ユネスコ世界ジオパーク地域はユネスコ審査の 1 年前に日本ジオパークとしての再認定審査を行うというルールを設けているので、これに則して本日 3 地域分の再認定審査を行う。

＜議題②新規認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査：萩＞

委員長：では議題 2 の新規認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査に移る。最初の 5 分程度スライドを使って地域の解説を行う。それから調査運営部会における審査結果を報告し、それに基づいて 10 分を目途に審議する。各地域の審査結果報告書の文案は審議が終わった後に確認する。では萩から。

副部会長：実際どのように現地審査が行われているのか、また今回審査した地域がどのような個性を持っているかについても紹介しつつ報告します。萩は、白亜紀から第四紀にかけての継続的なマグマ活動によって形成された大地と、そこで育まれた歴史遺産を有している。明治の維新志士を多く輩出し、歴史的な街並みなどが非常に特徴的な地域。阿武単成火山群という日本でも非常に稀な火山群の痕跡も見られ、河川によって山間部に形成された三角州の平坦面が、世界文化遺産の構成地を成す。海を見ると、アジア大陸東淵に位置する白亜紀の火山活動でできた花崗岩上に溶岩がのった境界が観られる。その石を切り出して城を作ったり、石垣を作ったりしていた。スライドの石に穴があるが、これはカニの巣穴ではなく、くさびを打って運び出そうとしてできなかった名残。山陰地方では珍しく火山活動がみられる。それを見て学ぶジオマスター講座の野外実習など、専門員が地質遺産の特徴を地域の方へ伝えている。現地に行った際には、行政及び地域でジオパーク活動を推進している中心人物の方と審査員が対話を行い、どういう活動をしてきたか、この地域はジオパークとしてどういった価値があるのかを直接ヒアリングする。現場に行って確認していかなければいけない事柄もある。例えばジオサイトにはどういう解説看板があり、内容はわかりやすく書いているか、あるいは内容が正しいかということをチェックする。萩は、白亜紀から第四紀にかけての幅広い地質年代に跨る地質遺産が見られ、そういった火山活動の中で生まれた大地に育まれてきた歴史文化を有する。その地域遺産や地質遺産を、地域住民や運営組織が非常によく表現し、活動しているという点が評価できる。特にジオパーク活動に興味を示した地域住民が着実に増えてきている。「ジオパーク」という文字の可視性、あるいは地域を通じた活動全体が大きく向上した。この地域は一度認定を見送られた地域だが、それ以後活動が大きく変わった。部会としては今後ジオパークとしての活動が十分できるという判断のもと、日本ジオパークとして認定したいと考えている。ご審議よろしくお願いします。

委員長：ありがとうございました。評価の資料としては記者発表資料があり、また審査結果報告書は最初の 1 ページ目に総評と、その地域が優れている点は何か、早急に解決すべき課題やできるだけ早く改善すべき課題、3・4 年先を視野に改善すべき課題は何かをまとめている。数週間後にはこの報告書を現地のジオパーク代表者宛に送付し、現地はこれを見て次の審査に向けた課題について検討するということになる。記者発表資料は本日公開となるので、著しくおかしい表現などがあれば修正する。

委員：言葉遣いについて、報告書の 1 ページ目の総評の中で、「可視化に向けた取り組みが遅れている」とあり、3 ページ目の 4 行目のところで「ビジビリティの向上」とある。統一した方がよいと思う。

委員長：ありがとうございます。新しい委員の方は何の作業をしているかわからなければ質問してほしい。

委員：前回の認定見送りから、指摘されていた住民への浸透と事務局体制などは充実したということか。今後安心してジオパーク活動をやっていいという評価を部会で下したという報告なのか。もう少し具体的に。

副部会長：まず運営体制、専門員の配置について、前回審査員として現地に赴いて指摘をした方が専門員になった。その方の働きによって地域住民がジオパークをきちんと理解し、自分たちなりの関わり方ができるようになってきた。萩では「まちじゅう博物館」という歴史関係の取り組みがあったが、それとジオパーク活動の関係性が前回認定見送り時の課題だった。その部分は解決され、ジオパークとして独立した地域活動ができる状況にあると判断した。前回は含まれていなかった阿武町と山口市の一部が参加し、ジオダイバーシティー等の価値も高まった。活動を下支えする地域住民の理解が深まっていること、地域そのものの部分において、ジオパークとして十分活動できるだろうという判断になった。

委員：もう一つ。萩の地域的地形的なところで、山陰文化において萩が中心になった日本海文化圏というか、北前船風待ちの港として寄港地となったという地形的環境があり、様々な交流をもとにして文化が醸成される中心地になっていった、というストーリーが5月のプレゼンテーションではあまり見えてこなかった。日本海文化圏をアピールするためにジオ的特徴がどう貢献したか、文化が発達する条件にジオがどう作用したのか、ストーリーをちゃんとしてほしい。

副部会長：日本海側に関する地形と歴史の関わりについて、明確な報告はなかった。ご意向があればそれを踏まえて審査結果報告書に書き添えるか、もしくはこれとは別に委員からのコメントという形で現地にお返しすることはあり得える。

委員長：今の点は確かに部会でもきちんと議論しなかった。何か一言一項目加えた形で盛り込みたいと思う。記者発表資料の確認も同時に行う。特に問題がなければ、これで認定するという方向でいきたいが、よろしいか。

各委員：異議なし

＜議題③新規認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査：土佐清水＞

委員長：では引き続いて2つ目。土佐清水について。

副部会長：土佐清水は、非常にユニークな組織を持つ「ラパピギ花崗岩」が露出しているというのが特徴。その花崗岩体が世界的に見て他地域より有意に年代が若いという特異性がある。ただし、それを学術的に説明するのは非常に難解。さらにこの地域は、約1,500万年前の日本海拡大に伴って日本列島が南側に向かって移動する際、それに伴ってプレートの沈み込みが相対的に速くなってマグマが大量にできた。あるいはそれに伴って短期間に大量の砕屑物の堆積が起きた。そういった一連の日本海拡大に伴う地殻変動の様子が太平洋側で見られるという特徴がある。例えば日本海が拡大していくときに海盆ができる。前弧海盆と呼ばれる低くなったところにたまった地層が竜串の海岸に露出し、非常にきれいな砂泥互層をつくっている。それらは地震あるいは津波、海底乱泥流などが累積してつくられたもの。その変わった景観から観光地としても有名で、毎年多くの観光客が訪れる場所。こういった地質学的、自然景観的な魅力が多数ある。山側、台地の方に上がると、海洋性の温暖な気候、ここは黒潮が流れていて比較的年平均気温が高いということ特徴があることから椿が多く産する。その椿を用いた椿アロマや椿の群生群落で自然ツーリズム的なものをやっている。現地の審査では椿の保存もそうだが、椿がどうしてここにたくさん生えているのか、あるいは椿が地域の暮らしにどのように関わっているかというストーリー紹介があった。地域の価値や魅力を伝えるための教育活動も積極的に行われている。前回の審査では現地審査に行かず、書類審査で認定見送りになったが、それは地域遺産の価値付けが不十分だったため。ジオ的な資産に関するリストはあったが、それ以外の地域資産に関してはリスト化されておらず、あまりにもジオパーク活動の体制としては不十分だということで見送りになった。その後はそれを踏まえた計画を立て、様々なワーキンググループをつくり、地域住民の活動、ジオサイトカルテ作成なども行っている。が、それらはまだ始まったばかりで、萩と比較すると地域住民との関わりがあまり見られない。決定的なのは事務局側と学者・研究者側の関わりの部分。地質の説明の仕方

が難解。そういう状況では活動が地域にもツーリズム的にも浸透していかないのではないか。こういった理由から、ジオパークとしての活動を行うにはまだ不十分であると部会では判断し、日本ジオパークとしての認定は見送ることとした。委員方にもご審議いただければと思う。よろしくお願いします。

委員長：ありがとうございました。土佐清水は昨年度も申請を提出してきたが、報告にあったように、前回はジオサイトカルテの作成や体制が不十分であるということで見送りにした。今年は再申請に対しての現地審査を行った。

委員：記者発表資料の方には、今報告のあった「事務局と研究者の持続的な連携を欠いている」という文章が入っているが、報告書本文にはそれは一言も書かれていない。今後の課題、改善すべき点の中にわかりやすく入れた方がいいのではないか。記者発表資料の方にはツーリズムの整備・推進が不十分と明確に書いてあるが、報告書の１ページ目の下のところでは持続可能性の根拠が十分じゃないという書き方で、全体的にわかりにくい。

委員長：そうですね、ご指摘のとおり。実はメールで最初に記者発表資料をお配りした時点では報告書の文章を使っていたが、昨日私が修正した。具体的に言ってあげないとどこを直せばいいかわからないし、何でも当てはまってしまうので記者発表資料を直した。おっしゃるように、報告書の方ももう少し具体的に付記すべきだと思う。

委員：今後の課題・改善すべき点のところでは、一文が一パラグラフを作るぐらい長い。もう少し今後の課題のところを具体的でわかりやすい文章にしてあげた方が対応しやすい。

事務局：報告書は現地審査に行かれた調査運営部会員が中心になって作成した。今まで土佐清水は指摘した課題だけに集中して取り組んでしまったという過去があるので、なるべく具体的に書かないようにしたと。

委員長：具体的に書いてないと、却って何をしていいか取り組み方がわからない。必要事項を書き切るほうがいい。解決すべき課題と報告書の１ページ目下段との部分をもう少し具体的になるよう、案を作った方にもう一度お願いして修正するということにしては。

事務局：案を修正し、最終的に委員長に承認していただくという流れでよろしいですか。

委員長：はい、結構です。

委員：この地域は一度申請して認定されず、またすぐに時間を置かないで申請してきている。人材育成あるいは地域への浸透には相当時間が掛かるが、土佐清水は事務局体制の構築や研究者との対話についても十分ではない。

副部会長：部会でも、どうしてまた申請するのかという話はあった。時期尚早という感はある。土佐清水は他のジオパークから人を呼んだり自分たちから出向いて話を聞いたりしていて、他のジオパークでは何をしているのか、その人たちが自分の地域を見てどのような判断を下すのか伺う、という情報収集をかなり頻繁にやっている。土佐清水のジオパーク活動がガラパゴス化している訳ではない。他所の知見を得ようという姿勢はあるが、しかしその知見が実際の地域活動に反映されていない。そこまで他のやり方を見ているならばもっと良くなっているはず。何故うまくいかないのかという意見もあった。

委員：仮に成果を焦る人たちがいたとして、それが原因であれば報告書へ明確に書かなくてはいけない。

委員長：少なくとも数年はかかることだから、準備期間が必要だとか明確に書いてしまっていいかもしれない。

委員：あとは環境省がどこまで積極的なのかということ。環境省は自然公園のことを自らの仕事としてビジターセンターを作ると思うが、それをジオパークと連携させるという意思は出来上がっているか。

副部会長：それは明確にある。環境省のレンジャーとジオパークに関わる地域や事務局の方々とは非常に良い関係が築かれている。これは土佐清水の中で優れた点であると言える。拠点施設も出来てきており、国定公園、国立公園としての整理は進んできている。それに周りがどう追随していくかということも課題。

事務局：審査員からの報告では、拠点施設の整備は進んでいるがジオパークの拠点として明確に位置付けられてはいないとのこと。それについて強化する必要があるということで、記者発表資料案では観光拠点の活用を含めジオパークとしてのツーリズム整備・推進が不十分と表現している。

委員：例えばジオツアーの企画で出発点にしてもらったりとか、あるいはガイドさんの拠点にしてもらったりしているとか、ほかの地域でもやっている形にはなっていないのか。

委員長：具体的な煮詰めになっていない。拠点施設が協議会の計画の中には入っていないので、それは問題だろうと。もう一つ、研究者と事務局との連携とあるが、研究者はストーリーというか申請書を作るところには参加している。それが終わったら全然何の関係もしない、関係がなくなってしまう。だからストーリーとしてうまく地球科学的な背景を取り込めていない。それが大きな問題。記者発表資料では（…プレスリリース案文読み上げ及び確認…）という結論。

委員：今の書き方だと、昨年度の審査で指摘された自然文化遺産の位置付けは、今やっていることで十分と読めるが。

委員長：十分というか確かに推進している、対応しているという意味。

委員:対応しているからこれ以上しなくていいということか。それともこの部分は不十分であるということか。

委員長：いい方向に向かっているのでどんどん進めてほしい、もっと推進してほしいという意味。だが、拠点施設をジオパークの中にどうやって位置付けるか。特に拠点施設がツーリズムの計画づくりに参加していないということ。それと研究者との連携。これらが大きな課題。

委員：「一方で」以下はわかるが、文章の上の部分が「推進されているがさらに」とか、「より一層」とかそういう言葉は必要ないか。

委員長：まだ不十分ではあると思う。書き方次第。

委員：それだけだと、今のままで大体いいよと読めてしまう。

副部会長：現地ではその計画を実行しようという所まで行っていない。萩はもう計画を作り実行している。その結果を受けてさらに向上させましょうというところまで進んでいる。地域住民の関わりや地域活動の在り方に関してプランニング段階で止まっていて、そこから前に行っていないのが土佐清水の現状。

事務局：この自然や文化の遺産の価値づけについて、土佐清水でサイトカルテというものを作っていて、前回申請時はジオサイト、地形地質遺産の価値付けのみだった。指摘を受けて生態系や文化遺産についてもカルテを作り、それを今回の申請において示しているということが、この「一部推進された」という根拠。全く着手していないわけではないが、委員がおっしゃったように全部できているという状況でもない。この辺のニュアンスが伝わるように変更が必要。全くできていないという書き方は違うと思う。

委員長：「推進されようとしている」とする。結論は見送りということで問題ないか。

各委員：異議なし

＜議題④ユネスコ世界ジオパーク再認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査：洞爺湖有珠山＞

委員長：議題 4 に入る。洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークは来年度ユネスコの再審査が入る。ここは 2 年前にユネスコの再審査でイエローカードだった。ユネスコ再審査の 1 年前ということで、日本ジオパークとして審査を行った。

副部会長：洞爺湖有珠山は 2 年前に日本ジオパークの再審査でグリーン、1 年前にユネスコ世界ジオパークの再審査を受けてイエローという審査結果であったため、今年再び日本ジオパークの再審査を受け、さらに来年ユネスコの再審査を受ける。4 年連続で日本と世界の審査を交互に受ける初めての地域になる。（写真を示して）これが洞爺カルデラ。カルデラの真ん中にあるのが中央火口丘の中島と呼ばれる溶岩円頂丘。更にカルデラの縁取りをなぞる形で活火山である有珠火山が活動している。これが洞爺湖温泉で大正時代に噴出したもの。非常に綺麗な景観と、その景観を利用した観光地としての歴史を持っている。また有珠山は、30 年から 40 年で噴火を繰り返す日本でも有数の活火山で、こちらが最新の噴火活動で出来た 2000 年、今から 18 年前の火口跡。もう一つ世界的な価値を持つものが昭和新山。1944 年、第二次大戦の最中に水田から噴火が起き、一つの山になった。それを郵便局長だった三松さんという方が克明に記録し、戦後に発表した。山が出来ていくプロセスを克明に記録したということで世界的な価値を有している。この地域は自然景観を

使ったエコツーリズムとか、あるいは火山マイスターによる火山の防災を含めた火山観光というものが非常に活発に行われている地域。世界審査あるいは日本の再審査における指摘事項への対応として、例えばジオパークであることが観光客や住民にわかるようにするためのウェルカムサインの作成。先ほどからコメントとして出ている可視性、ビジビリティへの対応だが、ジオパークのエリア内へ看板設置を行い向上に努めてきた。ユネスコ世界ジオパークでは原住民が持つ文化と今までの地域文化との融合、地域に元々ある文化を大切にして守っていくということも非常に評価をされる。アイヌの文化、アイヌ語の講座や衣装を含めたアイヌ文化の伝承、そういった活動をジオパークにきちんと位置付けて応援していこうとしている。このことは審査でも評価されている。前回の世界審査ではイエローカードとなったが、次の審査までには概ね課題が解決すると思われる。特に大きな課題となっていたのは、ジオパークの運営主体に常勤の地球科学者が採用されていなかったということと、火山噴火によってできた被災遺構をどうやって保全していくかということだった。現在は雇用募集が始まっており、さらには災害遺構の保全に関する対応も進んできている。日本ジオパーク及びユネスコ世界ジオパークの再審査においても、地球科学者の雇用があれば大きな前進になると思われるので、日本ジオパークとしては再認定でよいという評価を部会で行った。

委員長：ユネスコ世界ジオパークの場合は、翌年の審査に出来るだけできるだけうまく通ってほしいということもあり、委員会でそれを保証するという趣旨を含めて審査をしている。通常の日本ジオパークの再審査とはかなりハードルが違う。前回日本審査では再認定したが、その後の世界審査ではイエローとなり、2年後に再審査を受けなければいけないので、その前年ということで今年日本の審査を行った。

委員：このジオパークは火山マイスターと防災教育活動に関しては世界でもトップクラスと評価されている。一方で、ジオパークとして基本的なことが出来ていないという意味でイエローとなった。その一つが地球科学者の雇用。きちんとした待遇で募集が出ているので、専門員としてちゃんとした人を雇えるだろう。もう一つの災害遺構の保全に関しては、災害遺構を国立公園の保護地域にしてくれるという話が出た。しかしお互いの意思疎通が不十分だったためか、保護地域にしたことで草刈りが出来なくなり、災害遺構が物理的に見えなくなってしまっている。これは国立公園のほうと調整をし、災害遺構を保全することを目的とした保全計画を立て、災害遺構の可視化に取り組んでいる。

委員長：（地球科学者は）来年の審査時には雇用されているだろう。雇用条件がこれまで出したものと違うので大丈夫とは思う。世界の場合は、ユネスコから出された指摘事項に対してどれだけちゃんと対応しているかを中心に見て回ることになる。ここは16項目くらい指摘事項があったと思うが、そのほとんどの事項に対応している。雇用についてもきちんとした条件で公募を始めたというところ。

委員：指摘事項がクリアされる、あるいはクリアされることが確実だろうという判断を現地で得られたならば特に意見はない。ちょっと昔の知識かもしれないが、元々ここは壮瞥町が中心になっていて、自治体の連携について課題があったと思うが、だいぶ進展はしているのか？

委員：まだ問題がある。例えば洞爺湖に行っても周辺自治体のジオパークに関する案内がない。ジオパークに来る人も基本的に洞爺湖とその周りしか行かないので熱心じゃないという状況。一緒にやっているのだから、きちんと洞爺湖に来た人、昭和新山に来た人が他方にも行く気になるような、そういう掲示が必要だという話はしてきた。それは指摘事項にも書いてある。後は周辺自治体がどのくらい真剣に取り組むか。

委員：アイヌ文化だとか縄文文化だとか、自治体の中には世界遺産を狙っているところもあり、それが前面に出ているかはわからないが…。

委員：その辺が、火山マイスターがうまくいっている反面、悪い方に行っている。火山マイスターの方は火山が好きで、昭和新山や噴火の遺構が好き。周辺自治体の住民もいっぱい火山マイスターに入ってはいる。「防災教育パーク」になっている。地域全体の保全と観光の両立を考えたジオパークになるにはどうするかという課題がある。

委員：地域の人がその課題を理解したうえで、問題はあるけどそのうち頑張るというつもりなのか。それともしょうがないとあきらめているのか。JGCで指摘しないことでこのままになってしまうのは残念。明確に指

摘してあげればいいのでは。

委員：解決すべき課題には書いている。「縄文遺跡群やアイヌ文化とジオパークの関係、地球システムの中での洞爺湖有珠山地域の位置づけなどが可視化できるような展示や情報発信を進める必要がある。」

オブザーバー：質問してよろしいですか。先ほどご指摘（遺構の草刈りについて）のあった地種区分を改訂して規制を強化したのは私です。その当時から草刈りをすることは認めるという整理だったはずだが、時代を追うごとに風化してしまったんだろうと思う。一つ違和感があったのだが、アイヌの話はユネスコ世界ジオパークとしては必要だということか？ジオパーク活動の開始当初そういうストーリーは入ってなかったと思う。それを敢えて取って付けるようにして入れなければいけないのか。ストーリーの読み方を変えなければいけなくなるのではないかという懸念があるが。

委員：例えば地名とか。海の漁場になるところにアイヌの地名がついているとか。それ自体ジオパークの資源として重要であるという認識は協議会事務局にもある。その辺からやっていくと思う。アイヌ語の地名を解説した絵本を2年計画ぐらいで作っている。

委員：北海道・東北を含めて、地名として残っているアイヌ語は地形表現に関して非常に重要なキーワードになっている。私が以前審査員として行った際、ちゃんとアイヌ語を入り口にして、なぜそこで鮭が獲れるのかということと地形とが深い関りを持っていた。アイヌの人たちは地名に残すことによって意味を持たせた。

委員：昔から火山が噴火するたびにアイヌの人が伝統的にやってきた、火山を鎮める儀式がある。その保全にもジオパークは手を貸したいが、なかなか難しい。アイヌの方々は見世物にしたくない、神聖な儀式であると考えているから。だから審査結果報告書の書きぶりも難しい。記録や紹介といった表現にしているのはそういうこと。その儀式に関しては、ジオパークとしてこれまでも実は記録、保存している。もし今後噴火が始まり、その儀式が行われたら記録したいと考えており、それをすることが本来ジオパークとしてするべき活動であろうと思う。

委員：萩のほうでは世界遺産と区別しなさいと書いていて、こっちは世界遺産を入れなさいと書いてあるように読めるが。

委員長：萩の場合の世界遺産は城下町？

委員：「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」という世界遺産の構成資産の一つが城下町。

委員長：萩は以前「まちじゅう博物館」という組織の中にジオパーク事務局があって、「まちじゅう博物館」の取り組みの中でジオパークを展開しているような見え方であった。今は新しいところに部署を構えてまちづくりと並行して活動している。

委員：ご質問の趣旨をもう一度。

委員：（洞爺湖有珠山ジオパークを構成している自治体の中で）縄文遺跡の世界遺産登録を目指しているわけですよね。【できるだけ早く解決すべき課題】では「～関連性を整理して位置づけを確立する必要がある」と書いていて、【解決すべき課題】では「縄文遺跡を活用することで～」と書いてあるが、世界遺産と重複している場合は区別して活用しなさいということか？

委員：連携をとって活用してくださいという姿勢。

委員長：どちらのユネスコブランドにもお互いメリットがあるように、ということ。

委員：ユネスコ世界ジオパークの規範にそういう文章が書かれている。例えば資料5の8ページ目がユネスコ世界ジオパーク規範の日本語訳になるが、その中の4番目。ユネスコ申請地域が重複する場合、もし地域内にそのようなものがあれば、関わり合いを明確にすることが必要となってくる。アイヌ文化について後で取って付けたようだ、というご指摘だったが、地域住民、地域社会や先住民を積極的に活動に巻き込むということをユネスコ世界ジオパークは推奨しており、地域にアイヌの方々がいるのに、その方々の活動と全く関わり無い形でジオパーク活動をするのは良くないということをユネスコが言っている。積極的にそういう人たちとも関わることで、地域の文化を残していくという活動のためにジオパークの能力を供与しなさいというユネスコの方針に倣っている。

委員長：最初から縄文文化をテーマの中に入れて展開していたと思うが。

委員：伊達市の縄文関係を担当している学芸員の方が連携に熱心だが、縄文文化の展示を見に行ったら、展示物に火山のかの字も出てこないというようなことがあった。そこは改善してほしいと以前から言ってきた。学芸員の方とは連携が深まったので、今後は地域内での連携もできてくるんじゃないかと期待しつつ、課題として指摘している。

委員長：（…プレスリリース確認…）以上で問題がなければ再認定ということで決めたい。

各委員：異議なし

＜課題⑤ユネスコ世界ジオパーク再認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査：室戸＞

委員長：議題の 5、室戸。

副部会長：（写真を示しながら）これが室戸岬。水の中で溜まった地層がこのように垂直に切り立っている。ということは、本来水平に溜まる地層が切り立つような激しい地殻変動があったことを示している。室戸はフィリピン海プレートの沈み込みによって出来た付加体と呼ばれる海洋性堆積物が付いて、隆起して大地を作っていく最前線となる場所。プレートの沈み込みがあれば巨大地震が繰り返し発生するが、その巨大地震のつくる景観が海成段丘として表れている。現地に行くと海岸線のすぐ下の限られたところに平地が伸びている。そこから一段高くなった高台にも平地が残り、それぞれの平坦面が人の生活に利用されている。こういった海成段丘が何段か見られ、過去の地殻変動の様子が伺える。逆に言うと、将来この段丘をつくり得るような活動が起こる可能性が高い。南海地震等の発生が懸念される場所なので、防災教育なども行われている。四国八十八ヶ所巡り、お遍路のコースにも入っていて、特に空海が悟りを開いたと云われている洞窟が残っている。土佐清水とは気候区分的によく似ており、黒潮のもたらす海洋資源、海洋深層水が地域の名産。段丘は水はけが良過ぎる土地が多く、段丘堆積物で石がゴロゴロしている。水はけがよい土地を利用してサツマイモが作られ、芋ケンピとして売られている。室戸岬は台風の通り道でもある。今年も何回も強い台風が接近上陸した場所だが、そういった中での人々の暮らしぶりは町並みにも表れている。集中豪雨が多い地域では大量の雨が屋根に降ると壁がやられてしまうので、水はけを良くするために別の雨どいの様なものが付いている。これは水切り瓦。こういった景観自体がこの土地で暮らしていくための工夫を表している。そのほか風を除けるための石垣が海沿いに並んでいるといった工夫が見られる。ここには室戸世界ジオパークセンターと呼ばれる拠点施設が中学校の旧校舎を改修して新たにオープンしており、多くの人を集めている。この施設がジオツアーの拠点で、大阪などから来る大型バスのバス停になっている。そのジオツアーの中で、防災教育を盛り込んでいる。ガイドさんに優れた方がいて、自分たちで開発した小道具を使ってお客様を楽しませる、あるいは避難訓練を自主的に行って、何らかの有事発生の際にお客様を安全なところに避難させる訓練を行っている。特に地域の方の活動が活発で、若い人がジオパーク活動へ積極的に関与し、まちづくりに参画しているというのがこの地域の大きな特徴である。地域住民の活動そのものが非常に活発であり、その活動自体がジオツアー造成につながり、さらにそのジオツアーのお客様が増えて地域経済も少しずつ上向きの傾向が見られる。地域的な深刻な課題に対し、ジオパークプログラムを用いて積極的に解決しようという姿勢が見えるということで、日本ジオパークとして再認定してよいのではないかという評価をした。ご審議をお願いします。

委員長：ここも来年度世界再審査を受ける地域。前回審査で出されていた課題がいくつかあったが、それについては概ね対応出来ているとのこと。ご質問やコメントがあればお願いします。この地域はジオパークにトライして 10 年くらい経つが、その間現市長が非常に積極的に牽引してきた。室戸というところはアクセスがなかなか困難なところで、空港からでも 2 時間くらい掛かる。そういう環境にあってだんだん人口が減っていく。その中でジオパーク活動に取り組んで、住民として人口流出を止めるにはどうしたらいいか、次世代の人をどう育てるかということを真剣に考え始めたという良いところが見えてきている。

委員：意見というよりも情報がほしい。地域の産業というと立派で超豪華なホテルと海洋深層水。そういうと

ころとうまくやっている状況なのか、ジオパークとして。

委員長：ホテルがジオパークを活用しているということはあまりないと思うが、一緒にやっているという感じはする。深層水の施設は市の建物。市がそこをあまりジオパークとして積極的に活用しようとしていないところもある。ロゴマークがないなどジオパークとして取り組みが見えないので、もう少し強化するようにとはコメントしてある。

事務局：リゾートホテルが経営から撤退したが、別の企業が買収し経営しているので廃業にはならなかった。かつてはジオパークに協力的なスタッフがいたが、経営が変わったので新たに関係をつくり始めているところだろうと推測される。海洋深層水の施設などもジオパークの教育活動に使っているが、市の施設管理部署が変わったりロゴマークがなかったり、知らずに入っていくとジオパーク関連施設とわかりにくい。

委員：ランカウィとも姉妹連携をする予定とあるが、その理由。何故ランカウィなのか。

委員長：ユネスコ世界ジオパークは自国以外の世界ジオパークと連携する、展示物の交換をする、人事交流するということが望まれる。室戸の場合はランカウィとの連携を結ぼうとしており、それがいよいよ今秋には結べそうだという段階になった。交流協定を結ぶので、それに見合った体制の整備もしてくださいという書き方になった。（…プレスリリース確認…）マーケティングと特に書いたのは、地域外からの集客数、特に外国人に対する戦略がないので。また基本構想も文章化して整備されていないので、それは早急に作るようにという意味で入れている。では再認定するということで決定したい。

各委員：異議なし

＜議題⑥ユネスコ世界ジオパーク再認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査：アポイ岳＞

委員長：続いて、アポイ岳。

副部会長：1,300 万年前に二つの陸塊が衝突して北海道が形成され、その真ん中に日高山脈ができます。二つの陸がぶつかって捲りあがり、本来地表に顔を出すことのないマントルの一部が山となっているというのがこのアポイ岳地域の大きな世界的価値。マントルの一部、かんらん岩体がこの山をつくっている。かんらん岩体は非常に多くの重金属を含んでいて植物の育成には不向き。限られた栄養下でも生きられる特有な高山植物群落が見られるという生態的価値がある。海では昆布が特産品として収穫され、昆布を使った地域産品の開発と販売なども行われている。かんらん岩体以外にも半深成岩体であるひん岩の岩脈がある。そういう独特の景観、ひん岩によって形成された平坦地の港が育んだ北前船やアイヌ独自の文化と歴史を持っている。アポイ岳ユネスコ世界ジオパークの大きな特徴でありかつ問題点は、ガイドさんの説明が難解であるということ。突然ハルツバージャイトとか、サーペンティンとか言われてしまい、何の事かわからなくなってしまう。元々作られていたガイド育成用資料は、岩石学を学ぶ大学院生が読んでちょうどよいレベルのものが多かった。それを勉強してガイドするので、ガイドの説明も難しくなってしまうことが大きな課題だった。今回私が現地審査に行った際にはその点が大きく改善されており、ジオパークとして地域の特異性や特徴を楽しめる素地が出来つつある。別の問題は、ユネスコからの指摘事項への対応が中途半端であり、かつそのうちの一つはほぼ未着手であるということ。このままでは世界ジオパークの審査は厳しい。部会としては条件付き再認定という対応にして、早急に世界ジオパーク認定時に指摘された課題に対応し、準備を進めてほしい、と判断した。またユネスコ世界ジオパークは、先ほどの室戸のランカウィ提携もそうだが、海外の世界ジオパークとの交流を深め、ジオパークとしてのネットワーク活動に自主的に貢献していくことが求められている。その部分の活動が弱い。先日のイタリア国際会議のときに初めて海外のユネスコ世界ジオパーク関係者とかんらん岩のやり取りをしているという状況である。アポイ岳はユネスコ世界ジオパークに認定されてまだ 3 年目であり、ネットワークの仲間に入ったのであれば積極的に交流を築き、他所のジオパークに対していい影響を与える、いい事例を学ぶ、ということで、今後の活動の急展開、促進を期待し、条件付き再認定という評価を部会で行った。委員方のご判断ご指示をいただければと思います。

委員長：条件付きというのは 2 年後に再審査という意味。ご質問、コメントをお願いします。

委員：私の場合は審査をされる側の立場でもあるので、関連して一言。審査結果については皆さん真剣に審査されている。具体的で詳細な指示内容は十分理解できてありがたいが、指摘を受ける側としてはもっと大枠で。例えば教育なのか事務局体制なのか住民協働なのか、どの分野が欠けているので改善しなければならないということを可視化してほしい。例えば野球だと、守備力、打撃、投手力、采配など、診断図を作って五角形なり六角形ができる。そういうもので具体的にここが欠けているということを言っていただければ、今どう評価されているかもわかる。住民に対して「事務局体制が悪いと言われている」など大枠で言える。そういったことができればいいし、できなければ各地域へ報告するときに「住民との協働という分野が、特に欠けていますよ」というような指摘が頂ければいい。ここまで会議をしてきて最後に言うのは申し訳ないが、一つお願いする。

委員長：これは重要なこと。後で議論させていただいてよろしいか。委員の方もいろいろ考えておいていただきたい。指摘されたのは、もっと見えやすくどの部分が欠けているのか、例えば亀の子みたいなダイアグラム上のポイントで見えるように可視化できないかいうこと。文章である程度書いているとは思うが、委員方も心に留めていただいて後でご意見をいただく。さてアポイ岳だが、部会の判断としては条件付き再認定で出したい。イエローを出すことによって受け取った方は真剣に考える。受け取った側が行政的に対応するために、逆に役立つというメリットもある。純粋に悪いから出しているのではなくて、改善できるだろうということを見越してイエローを出しているつもり。今回の場合は対応策を早急に執り、1年後の審査に備えて全力でやってほしいという意味。

副部会長：補足すると、未着手というは「サスティナブル・ツーリズム」、持続可能な観光活動や「サイエンス・ポピュラリゼーション」、科学的知見の普及活動を促進させるために効果的に観光客へのヒアリングやモニタリングをしなさいという指摘に対して、ジオツアー参加者へのアンケートだけで済ませていた。それでよいのかという問題があって、しかも指摘された事柄を誤解していた可能性もある。早い段階で意向調査を進め、ジオツアーを「この意見があったからこう改善した」ということがわかる形に変えていかないといけない。

委員：以前の審査ではギリギリのところで合格した地域だと思っている。GGNの指摘事項への対応が十分ではないという判断ならば、イエローカードでも仕方がないと思う。そのうえで前から指摘していたつもりだが、一丁目一番地のアポイ岳ツアーでのジオというか、かんらん岩の存在をガイドの方が面白おかしく伝えられていないというところが課題。誰も行けないマントルの上を歩いているような気持ちにさせるようなツアーを考えてくれとずっと言い続けていた。別にハルツバージャイトなんて言わなくていい。ここは地下何十キロを歩いている位は言ってほしい。科学的に嘘にならないよう研究者の方とうまく連携してやればよい。アポイ岳の一丁目一番地なので、そこをやってくれないと寂しい。

委員：現地に私が行った時にも、それは残念ながら残っていた。この植物は何、あの植物は何と、植物観察会になってしまう。どうしてこの植物がここに生えているのかと質問して、初めてかんらん岩の話が出てくる。かんらん岩があるからこの植物が生える、で止まってしまい、何故かんらん岩があるのか、までいかない。ガイドさんたちとしては頭の中で繋がっているのだろうが、それが自分たちの中で説明の一番になっていない。そのあたりの意識はまだまだ。最近はピンポン玉など小道具を使い、「これが月で」から説明が始まるようなガイドの方たちの活動が見えてきたのは大きな進歩。

委員：様似の昆布は何故一番おいしいんだというのもかんらん岩の上で干してるからです、みたいな（笑）。それを理論的にちゃんと大学の方に研究してもらってほしいというのも課題だったのだが。

委員：北海道大学との包括連携協定を結び、水産系学部でいろいろ調べているがあまり因果関係が出ないらしい。今回は昆布が何故かんらん岩地域でおいしいかについてはノータッチ。ただ昆布が特産品であることは間違いない。これをもっと見える化する形で出してもいいのではないかということは現地で言ってきた。昆布アイスとかぱりぱり昆布というおつまみがあるが、もうちょっと切り込んだ売り方、出汁を使った特産の料理とかあっていいと思う。

委員：もう一点。防災のことがあまり指摘されていないが、ここは海域にすら活断層があって、地形も隆起した海成段丘もあるだろうし、今度の地震（9 月 6 日に発生した平成 30 年北海道胆振東部地震）にもつながるような地域なので、以前からそういうことを防災上意識するようにということも伝えていたと思う。そういう意味で、防災のこともちょっと指摘して頂いた方がいいかと。

副部会長：実際審査に行ったときに震度 4 の地震があった。朝の 3 時ぐらい。地震活動、東日本大震災で被災した場所でもある。逆にそういう活動がアポイ岳の形成にもリンクするということをちゃんと意識した説明が必要ということを現地ではコメントしてきた。防災という形では確かに取り組みはやっていない。意識した活動を行ってほしいということは付け加えさせていただく。

委員：ここはあまり地形の話をしない。地形的にもいろいろ語れるところだが、せっかく地形的にもいろいろ語れるところなのでもったいないと思う。

委員長：指摘事項へ対応していないという決定的なことがある。コメントもいくつかいただいたのでそれを含める。

事務局：記者発表資料の表現が審査結果報告書と異なっていて、二行目最後の、「ジオパーク活動を推進していくうえで盤石な運営体制が確立されている」という“盤石な”の表現が言い過ぎかと思う。報告書の方では”安定した運営体制の整備“となっているが、”安定した“でよろしいか。

委員長：人数だけでいえば事務局員数、あるいは専門員数は多い。日本ジオパークの中で一番多く充実度が高い。だけどそれらはあまり連携しておらず、体制としてあまり十分なものではないと思う。

委員：「安定した体制で運営されている。」

委員長：では読みます（…プレスリリース案文確認…）。よろしいか。ではそういうことで決定したい。

オブザーバー：質問してよろしいか。条件付き再認定とした後に委員会としてアポイ岳にどういうフォローをするのか。というのは、例えば課題として指摘されている“持続可能な観光や科学の普及発展を目的とした効率的な意向調査の実施”とあるが、これを普通の人が読んでも具体的に何をすればよいかわからない。先ほどの池田委員のお話にも通じるが、課題として指摘されたことをこの委員会の中で理解されても、現場レベルで理解されないと意味がないのではないかと懸念する。今後のフォローをどうされるのかお聞きしたい。

委員長：初めて会議に参加されたのでわからないと思うが、我々は委員会として指摘するだけではなく、現地に行った審査員を中心にフォローアップをする。フォローアップはちゃんとやってきていて、イエローカードの効果はかなり出てきている。それでも改善しないところは問題があるということで、もう一回やり直してくださいという場合もある。総じてイエローカードは効果を上げているという風に考えている。世界再審査の前に出したイエローカードについても、それについて真剣に取り組んでくれている。世界の審査ではグリーンカードという実績がある。各地域には専門員もいて、事務局が非常に密に連絡を取り合っている。我々のやり取りの中でわからないところがあればちゃんと聞いているので、地域に対して言いっ放しということはない。

オブザーバー：指摘事項に対してアポイ岳が着手できなかったことに理由があるはず。先ほど報告者の方が言われていたとおり誤解していた部分があるのではないか。それが改善されるのかというのが、この文章を読んだ限りでは難しい表現だったので、そこを懸念したということ。

事務局：ご指摘された“持続可能な観光や科学の普及活動に向けて効果的な訪問者のモニタリング等”ということを明記している理由として、これは世界審査の際に指摘された事項。日本語訳した際に読み間違えを起こした部分。報告書でも敢えて明記してある。3 年前にも同様な表現で、英語で指摘されている事項だったにも関わらず正しく把握されていなかったということが今回の審査で判明したので、これは事務局として前回の指摘事項を理解しているのかという観点からフォローしている。

オブザーバー：明記されることは必要だが、内容が分からなければ意味がないということ。

事務局：内容ももちろんですし、そもそもの指摘事項や意味も含めて正しく把握できていなかったということが今わかったので、そこのサポートから必要という認識。

オブザーバー：“審査される側としては”ということは、別の委員も言われたがまさにそういう意味。受け手側としてはよくわからないことを言われてしまうので、是非フォローをお願いしたい。

委員：これまでも指摘した際には必ず電話で説明するし、委員が現地へ行って、理解できていない様子であれば集中的に説明する、といった感じでやってきた。ただ受け入れる側の能力にもよるので、おっしゃるとおり言ってもなかなか通じないこともあるというのはある。

委員長：それでは条件付き再認定で決定する。よろしいですか。

各委員：異議なし

＜記者発表資料確認＞

委員長:それでは議事次第に従い、発表資料の確認を行いたい。各委員確認を(…プレスリリース文案確認…)。以上で問題ないか。先ほどのアポイ岳、土佐清水への指摘については、修正を加えたものを記者発表で使う。ほかこの部分はこうした方がよいというところがあれば修正する。

各委員：異議なし

＜審査結果のより分かりやすい提示について＞

委員長：もう少しどこが欠けているかビジブルになるような表現はないものか、ということでご指摘をいただいた。全地域同基準で表現できるかというとそうではないので、地域によってある分野だけ突出しているということもあり得るし、レーダーチャートが丸くなれば良いという話でもない。それと現在自己評価表というものを使い始めている。その中であらゆる分野を網羅したような点数、自分で点数をつける箇所もあり、それに対して審査員が現地審査をする際に点数をもう一回考える。現地の方と一緒に判断をすることもある。それは委員がおっしゃったビジブルなものであるとは思う。ただ、それは何点であれば満足なのかという話ではない。非常に難しい。100 点満点のうちの 20 点 30 点ではだめだろうが、それが 50 点ならよいのか 70 点ならよいのか、その辺が非常に曖昧。そういう表現をしたところで、これはこうだ、ということは言えない。自地域がどこに特徴があるのか、どこが欠けているかということは見える気はする。

委員：亀の子みたいのがあると非常にわかりやすい。認定見送りだとか問題点があるということは及第点に達していないところがあるということ。可視化によってそれが目視できるのであればいいことではないか。及第点を取ってる中でどこが特徴的で有利なところなのか、良いところがどこなのかというのが、地域の方々にもわかる。どの指標を作るか難しいが。

委員長：全部網羅するのはなかなか難しい。

委員：基本的に認定見送りになったという地域は、間違いなくどこかが及第点に達してないということ。それを可視化して出すのはいいことだと思う。

委員：一度、調査運営部会で作ってみるか。

委員長：基準になるのは自己評価表だと思う。ここ一年で試しに使い始めた。自己評価表の A 表 B 表はご存知だと思うが、日本でも使い始めたのでそれで表現できるかもしれない。

委員：指摘事項の内容についてはありがたいと思う。細かいことは改善していかなければならない。申請する側、特に認定を見送られた地域の協議会は、住民にそのことを説明しなければならない。その時に細かな説明は住民の方にもわかっていただける。自己採点というのも点数化という点で理解できるが、今この委員会がどう評価をしているのかを点数ではなく、例えば５段階でこの辺だというのを示せればいい。細かい点数ではなく、亀の子で今回の審査ではここの分野が特に弱かったということで。例えば土佐清水は書類審査から二回目。やはり住民に対して説明責任がある。何回も言うが、細かい点数ではなくここがだめだとわかりやすく言ってあげたい。

委員：この自己評価表の点数とは別につける必要がある。

委員：ABCD くらいでいいと思う。

委員：優れている点、劣っている点を明確にするということ。

委員長：なんとなくできそうな気もするが、いざやると難しいかと思う。

委員：自己評価表を基本にしないとコミュニケーションツールにならない。自己評価表と審査結果の差はこんなにあるということがわかるようにする。

委員：何度も自己評価表を使ってきた経験からすると、自己評価表は非常に不完全で、この点数をもとに単純に評価するのは難しい。あれは自己評価表に載っている項目についての評価であって、ジオパークとして重要な事柄なのに配点が必ずしも高くないということがある。例えば地球科学者を雇っていないと大抵の場合ジオパークとしては審査を通らないが、自己評価表の配点は何点も割いていない。レーダーチャートを作る場合この自己評価表とは別に、総合評価をしたらこうなったという結果を示すしかない。

委員：そうすると自己評価表というのは意味がない。何のために作っているんだと。

委員：ジオパークカウンシルでも何のために作っているのかという議論になっており、その改革をしている。

委員：審査結果報告書をそれぞれの地域に赴かれた審査員が書かれている。中身としては現地に行かれているのでこの評価でいいが、せめて地質やジオサイト、あるいはツーリズムなど、どの分野に問題があるのか小見出しで箇条書きにすると随分わかりやすい。直近の課題というのが小見出しでわかるだけでもいい。無理に5点とか3点にすると、そこは嘘が出てきてしまう恐れがあるので、難しい作業にはなるがわかりやすくする方法はあると思う。

委員長：かつての報告書は、項目ごとにどれくらい進んでいるかという書き方をしていた。最近総評という書き方になって消えてしまった。考えさせてほしい。調査運営部会に持ち帰って、一番いい表現の仕方、わかりやすい受け止められやすいやり方で提案したい。

＜その他確認事項等＞

委員長：その他の確認事項を事務局から。

事務局：次回第36回委員会は、1月18日金曜日の午前中に開催する。また、審査基準検討会議は1月17日木曜日、委員会前日の午後開催予定。

委員長：調査運営部会で審査の表現方法について、案を18日に持ち寄るという形になるのか。

事務局：調査運営部会を12月に開催する。審査基準検討会議でもこの話題を話し合った方がいいので、調査運営部会で案を出し、1月17日の検討会議で話し合うという流れになるかと思う。

委員長：分かりました。残りの資料を掻い摘んで説明。資料6はGGN、Global Geopark Networkの2018年から2020年のStrategic Plan。元々2016年から2020年の案があり、それをリバイズして18年から20年に特化したもの。ここにはネットワークをどう強化していくか、どうブランドを高めていくかということが書いてある。ほかにジオパーク審査員の選び方のプロセスについても提案をしている。提案段階ではあるが、一応総会で承認された。細かい修正については今年10月の中頃までに回答することになっている。私が日本の委員会の代表としてコメントする義務がある。2ページほど捲ると、“GGN Evaluator Selection＆Management Processes”という項目がその提案内容となる。このArticle1にデータベース作成とある。これは審査員のデータベースを作るということ。それに基づき、Senior EvaluatorとEvaluatorに審査員をカテゴライズする。ユネスコ世界ジオパークの審査は2名で行うので、うち1名がSenior Evaluatorという形になる。特に問題の多い地域についてはSenior Evaluatorが2名で審査に当たるという形にしようとしている。Senior EvaluatorとEvaluatorの違いは6回審査を経験したことがあるかということと、一日のEvaluatorセミナーを受けたことがあるかということとなっている。Evaluatorは6回審査をしたら自動的にSenior Evaluatorになるのではなく、審査に同行したSenior Evaluatorから評価を受け、点数の優れた者がSenior Evaluatorになる。Evaluatorとなるにもセミナーを受ける必要がある。Article3はトレーニングについて。10月から何度か行われる研修会あるいは世界大会に参加し、1日講習を受けることが義務付けられている。日本もこういう形に類したもので対応した方がいいのかもしれない。最後の一枚はどうや

って審査員を評価するかを示した資料。イエスかノーかの5点から0点という形でポイントをつけ、審査ごとにSenior EvaluatorがEvaluatorを審査する。あるいは地域がEvaluator2名を評価するということを繰り返す。その評価を集め、Evaluatorとしてふさわしいかどうかを判断し、評価の悪い人はEvaluatorから追放されるという形にしている。ユネスコ世界ジオパークの品質保証をするため、再審査だけでなくEvaluatorの均質化、基準をクリアした人だけが審査員になるという仕組みを採用する。

委員：付け加えると、Evaluatorになる時点でジオパークの重要なポジションで4年以上働いた人。その上で経験学識のある人という条件。

委員長：何かこれについてご意見、コメントがあれば。日本も審査を受けるほうがEvaluatorを評価するという仕組みを取り始めるのか。

事務局：今度の審査からするということは決まっている。

委員長：次回か来年度。

事務局：来年度からでないと間に合わない。

委員長：来年度からは審査員も評価されるという形になる。審査ができるだけ偏りのないよう行われるようにしたい。議題は以上。

事務局：一つ補足。ユネスコ世界ジオパークのEvaluatorとなるためには4年以上の経験が必要。この条件を参考に、全く同じではないものの何らかの経験を積んでいるということを条件として調査運営部会員の公募枠を作った。学会推薦枠については推薦側に任せている。

委員長：この後記者会見をして各地に電話連絡をします。本日はどうもありがとうございました。

終了